日本の花火技術は最も精巧で華麗！

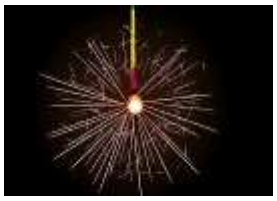
夏の夜の打ち上げ花火は、どれもが様々で美しいものです。今年も、岡崎市花火大会をはじめ、全国で花火大会が催され、各地で賑わいに彩りを添えることでしょう。

日本の花火技術は世界で最も精巧で華麗なものとして称賛されています。花火のルーツは、紀元前の中国にあると言われています。秦の始皇帝の時代に、通信手段として「狼煙」（のろし）が使われ、火薬技術の発達とともに花火が誕生しました。日本に観賞用花火が伝わったのは江戸時代で、将軍家や大名の間で流行し、やがて江戸庶民にも広がりました。
享保の時代には、飢饉や疫病が蔓延し、死者の慰霊と悪疫退散を願って、水神祭で花火が打ち上げられました。これが花火大会のルーツだと言われています。この時代に活躍した花火師に、玉屋市兵衛や鍵屋弥兵衛がいます。今でも花火のかけ声として「た～まや～」「か～ぎや～」と言われる所以はここにあります。

慰霊や平和への願いなど、花火には人々の様々な思いが込められてきました。夏の夜空に開く大輪を眺めながら、自分なりの願いを込めるのもよいのではないでしょうか。

日本の夏「線香花火の物語」

夏の風物詩といえば「花火」です。「線香花火」は、火がついてから落ちるまでの間に、火花の様子が４回変わることを知っていましたか。最初に、チロチロと膨らんで燃える様が「牡丹」（ぼたん）です。次に、パチパチと勢いよく音が鳴る「松葉」（まつば）に変わります。そして、だんだん火足が下がるのが「柳」（やなぎ）。細い火花が一本、また一本と消えていくのが「散り菊」（ちりぎく）。これら４つの現象を経て、小さな玉になった火はボトンと落ちます。この燃え方は、昔から「人の一生」にも重ねられてきました。この世に生を享け、すくすく育っていく様が「牡丹」で、「松葉」は青春時代から働き盛りの時期。人間的にも円熟味を増して「柳」になり、最後は衰えて「散り菊」、火が消えるというわけです。



１本の線香花火に使われる火薬の量は、わずかに 0.07 グラムほどだそうです。耳かき２杯程度の火薬を和紙で撚って、線香花火は作られます。その精緻な技術もさることながら、そこに人生をもなぞらえるあたりに、日本的な感性があるかもしれません。

❤ Happy Birthday　７／２‥恒川　雛 さん